

まか
顔十郎罷り通る下
柴田錬三郎



かおじゅうろうまか とお
顔十郎罷り通る 下

しばた れんぎふろう
柴田錬三郎

© Eiko Saito 1986



講談社文庫
定価400円

昭和61年1月15日第1刷発行

発行者——野間惟道

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽 2-12 21 〒112

電話 東京 (03) 945-1111 (大代表)

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。 (庫一)

ISBN4-06-183660-9 (0)



講談社文庫

顔十郎罷り通る

下

柴田錬三郎

目次

帝王の子	七
深夜の座	二〇
しびれ酒	三五
独妙劍	四九
闇中間答	六三
修羅街道	七八
黄金窟	九三
陰謀熊	一〇六
裏店大名	一二〇
千姫伝奇	一三四
贗行列	一四八

不思議の勝利……………一六三

黒姫島……………一七五

姉の仇……………一八九

秋扇譜……………二〇三

修羅図絵……………二一七

血闘山……………二三一

妖刀……………二四五

贗宮本武蔵……………二五九

犬死……………二七四

消えた夢……………二八八

山吹妻……………三〇一

解説……………磯貝勝太郎 三六

顔十郎罷まかり通る
(下)

帝王の子

—

「あつ！ 青空だつ！」

長屋の子供たちが、泥溝の中から小判でも発見したように、叫んだ。

「青いなあ！」

「きれいだぞーっ！ おつ母、出てみる！」

「やあい、お天道さま、顔みせろ！」

夢中で、空へむかつて、声をはりあげた。

むりもなかった。じとじと、十日以上の霖雨なごめで、夜明けまで降りつづいていたのである。

江戸の貧しい人々を、さらに困窮させるのは、雨であった。外へ出て働く日傭取り、大道商売あきないがあふれるのはもとより、魚も野菜も売れなくなる。湯屋さえも、薪がなくなるしまつだった。

また――。

長屋は、雨漏りがする。路はぬかるむ。泥溝は、あふれて、病氣をばらまく。臭気は、江戸中にたちこめる、といつても、あながち誇張ではなかったのである。

ここ――市谷八幡の森のある高台と、四谷の台と、二つの丘陵にはさまれた窪地の貧民地域と来たら、まったく、ひどいものであった。

窪地の中央を流れている臭気の満ちた泥溝川の左右に、蜂の巣のように、傾きかかった櫓を、互いに支えあつて並んだ長屋は、もう数十年前から、変らぬ惨めな光景を呈しているのであった。土方だとか、人足だとか、香具師だとか――。

いや、それらは、まだいい方で、盗人や夜鷹や乞食も、すこしも、自分のやっていることをかきさないでもない世界であつた。

雨が二日も降れば、何も食わずに寝ているよりほかはない世帯ぞろいであつた。

子供たちが、歓声をあげたのも、当然であつた。子供たちだけは、親が食わずに、ひもじくないようにさせているのか、元気で、声も大きい。

まもなく――。

雲が散つて、かつと、拭つたように晴れ渡つた。

屋根からも、路からも、泥溝板からも、いきが、たちのぼつた。これが、おそろしい臭気のもつたやつだつた。

一斉に、檻樓が、おもてへ、かつぎ出されて、これは、惨め乍らも、壯観であつた。

顔十郎は、尻端折りをして、板屋根の上へあがつて、雨漏りした筒処に、木片を打ちつけていた。

何を好んで、こんな最下等の地域でくらしはじめたのか。そこが、この男らしい、と云えなくもないのだが……。

「暑いな！」

鉄槌かねづちをもった手の甲で、額の汗をふきつつ、青空を仰いだ。

照りつける陽ざしは、もはや夏のものだった。

むこうの崖下では、長屋の男たちが総出で、崩れた土を除けている。

香具師も泥棒も毒消し売りも女衞めがねも贗盲の乞食も、黙々として、蟻のように働いている。

その崖の上には、長い築地塀があり、うっそうと巨樹が、緑の壁をつくっている。

内藤駿河守重正——幕閣中に、陰然たる権勢を誇る若年寄の下屋敷であつた。

——同じ人間に生れて、こうも、くらしがちがうものか。

今更に、顔十郎は、感慨を催す。

あまりに不公平すぎる世の中である。大名の子に生れれば、少々脳が足りなくても、大名になれる。貧しく生れた者は、一生貧しく、地虫のように生きなければならぬ。

そして、この仕組を、誰も疑ってはいないのだ。

いや、疑っている者も、いないわけではない。ここにも、一人いる。しかし、あまりに渺すくなくいし、ばらばらなのだ。

「小父さあん！……鼻の小父さあん！」
廂の下から、呼ぶ声がした。

となりの家の少年であつた。母親は夜鷹であつたが、明るい性格の少年であつた。

「どうした？」

「ちよつと、降りて来ておくれよ。おねがいがあるんだ」

「いま、行くぞ」

長屋板は、殆ど腐つていて、よほど要心して踏まなければ、かえつて、雨漏りの箇所をふやすようなものだった。

鼻がつかえそうな、両側から廂の突き出た狭い路は、泥溝川沿いに、人一人やつと通れるくらいであつた。それも、いたるところに、水が溜つている。

ひよい、と身軽く、流れの縁へ、跳び降りた顔十郎は、金太という少年のうしろに、思いがけず、髪斗目の振袖をつけた少年を見出した。旗本か大名の若君といったところである。帯びている脇差も、ふつうの士分の子弟のものではなかった。

その背後に、長屋の子供たちが、もの珍しそうに蝟集していた。

「鼻の小父さん。こいつ、迷い児になりよつたので、つれて来たんだ」

「迷い児に？ どこで——？」

「八幡様の森の中に、しゃがんで、じつとしていたんだ」

「ふむ——」

覗き見て、顔十郎は、——はてなと小首をかしげた。その貌かおが、ふしぎな氣品をたたえて、普通の造作ではなかったのである。

——これは、ただの人相ではないが……。

「そなたは、どこの屋敷の子息かな？」

と、訊ねかけると、金太が、そばから、

「駄目だよ、小父さん。啞みてえに、何も云やがらねえのさ。いっぺんだけ、口をきいたけど、ちんぷんかんぷんさ。きつと、バカなんだぜ。西も東もわからねえのさ」
と、告げた。

それをきいたとたんに、顔十郎の脳裡に、ひとつの直感がひらめいた。

——あるいは？

——そうだ、もしかすれば？

二

顔十郎は、少年をほろ畳の上に坐らせて、しばらく、腕を組んで、正視していたが、やがて、
ひと言、妙な言葉で、質問を發した。

すると、少年は、にこっとして、これも、妙な言葉で、こたえた。

「何を云ったんだい、鼻の小父さん？」

うしろにかしこまっていた金太が、訊ねた。

「お前は、清国^シの若君ではないか、と問うたのだ。そうだとこたえたぞ」

顔十郎は、しばらく、長崎にいたことがある。支那の言葉を、その時に、おぼえている。

少年は、この奇妙な顔つきの大人が、自分の国の言葉を知っているのに、蘇生の思いをした様子で、急に喋り出した。

「待て、待て。そう早口に、やられては、さっぱり、わからん」

顔十郎は、手をふってから、自分の質問にこたえさせることにした。

きいているうちに、顔十郎の表情が、しだいに、ひきしまつて来た。

少年は、そのうちに、手真似で、熱心に、何事かを、顔十郎に告げはじめた。
合点するには、ちよつと時間が、かかった。

「よし、わかった」

顔十郎は、大きく頷いて、片手を、少年の頭にのせた。

「金太——」

「うん」

「この子の世話をたのむ」

「引受けたぜ」

金太は、きいたふうに、ぼんと膝をたたいてみせた。

小石川の小白向清水谷に、徳光寺という天台宗の古い寺院がある。

顔十郎が、その山門をくぐったのは、日昏れがたであった。

顔十郎は、ひさしぶりに、やり甲斐のある仕事にぶつかって、爽やかな気分になっていた。

少年は、清朝九世文宗（咸豊帝）の長子黄親王であった。

当時、さしも盛威を誇った清朝は、ようやく落日を迎えていた。

清は、愛親覚羅氏、太祖は努爾哈赤、という。

努爾哈赤は、長白山の麓に起って、満洲諸部を撃ちしたがえ、国号を後金となえ、ついで、

明軍を破って、都を、瀋陽（奉天）にさだめた。

嗣いで立った太宗は、太祖の第八子で、遠交近伐、大いに領域をひろめ、国号を清とあらた

め、三世の世祖に北支那を平定して、都を北京に遷したのである。

聖祖、世宗、高宗（乾隆帝）にいたる百三十余年間、清朝はその盛威をほしいまにし——就中、康熙、乾隆二代は、文運武略ともに発達し、内外蒙古を征服して版図に容れ、なお天山南路を平定して、その威光を、シャムや安南にまでおよぼして、朝貢せしめたものであった。

八代宣宗にいたって、阿片戦争が起り、国威は傾き、九代文宗が嗣ぐや、英仏連合軍の侵略は甚しく、また、広西の金田村から起った洪秀全の率いる農民の叛軍（長髮賊）に、悩まされるにおよんで、その前途は暗いものになっていたのである。

いつの時代、いずこの国でも、そうであるように、盛威があまりに大きく、朝廷の豪奢が極まれば、それは、永遠につづくような錯覚が起る。

帝王というものは、国家を挙げて、財力と人力を傾け尽した宏壯猷麗ゆうれいな宮殿の中に住んでいる。就中、支那の帝王の生活は、今日では、想像もおよばぬ。

「皇居の壮を見ずんば、天子の尊きを知らず」

という語さえある。

秦の咸陽宮は、戦火を受けて炎上するや、炎々として三カ月もつづいて、なお全焼しなかった、という。

咸陽宮におよばずとも、北京紫禁城は豪宕雄偉ごうとうを誇り、これにくらべれば、江戸城などただの武家屋敷でしかなかった。

よほどの名帝でない限り、そのような宮殿内で、多くの宮嬪きゅうひんにとりまかれていると、バカになる。

清の後宮は、歴朝のそれに比べれば、かなり質素なものであった。それでも、妃嬪の居館は、紫禁城の東西に六宮を列ねていた。

九世文宗咸豊帝は、決してバカではなかったが、東南に長髪賊の乱が起っていることを、すこしも知らなかった。

のみならず、英仏連合軍の攻撃に遭うや、なすすべもなく、母の孝貞皇后、妻の孝欽皇后（西太后）とともに、熱河に遁れたのであった。

清朝は、満洲から起っている。

漢人は、満洲人を、輕蔑していた。

長髪賊の頭領洪秀全は、そこをたくみに利用した。
その檄文中に、

「天下は中国の天下にして、胡虜の天下に非ざるなり。宝位は中国の宝位にして、胡虜の宝位に非ざるなり」

とうたつて、漢人を唆り、百万以上の軍勢を擁するまでに、勢いさかんとなっていた。

顔十郎は、長崎に在った時、清朝戦乱のことをきき、文宗が熱河に蒙塵した噂も耳にしていた。

長子黄親王は、なぜか、父帝にしたがつて熱河へ行かずに、日本へともなわれたのである。

少年は、顔十郎の質問にこたえて、自分を日本へつれて来てくれたのは、徳光寺のお坊様であつた、とこたえたのである。

三

境内をゆっくりと横切つて、方丈へ近づいた時であつた。

突然、方丈の内部で、物音が起つた。

それは、顔十郎をして、はっと足を停めさせ、次の瞬間、飛鳥のように奔り出させる物音であつた。

顔十郎が、広縁にとび上つた瞬間、